

スウェーデンではオンカロ（隠れた場所という意味）という名の使用済み燃料貯蔵施設を建設中で、使用済み核燃料は再処理しないで埋め、10万年先まで保管する計画ですが、これは完全にまやかして、大陸が分裂する地殻運動がありますから10万年先などは猿の惑星より以上のSFの世界で、そんな先のことは責任は持ちません、という宣言でしかありません。

高速増殖炉の研究の歴史は古く、理論的には原子理論、原子核、陽子、中性子の存在が明らかになった時点で、高速増殖の理論は確立し、高速増殖炉の概念は1950年代にはありました。

世界は高速増殖炉の研究・開発に血眼になって競争になった。もし最初にこの夢の原子炉を実現したならば純国産のエネルギー形態ができて、世界をリードできる最大の要因になる、と考えられていた。

この研究・開発を1歩リードしていたのがフランスで「スーパフェニックス」という実証炉まで造り研究を継続したが、頓挫してしまった。

ドイツは完全撤退、原発も止めると世界に公表した。イギリス、ロシア、アメリカも公表はしていないが息切れしてしまい中止の方向にあるようです。

電力の約80%を原発に依存するフランスについて述べます。フランスには世界最大の原子力複合企業であるアレバ社があり、世界をリードしており、福島原発事故でもアメリカとほぼ同時に事故救済を申し出ており、汚染水処理ではアレバ社製の汚水処理施設を導入したが、残念ながら余り結果が得られず、東芝製のサリに替わった。

アレバ社はフランス政府が株式の87%の保有する国営企業でウラン鉱山からウラン濃縮、核燃料加工、原発、核燃料再処理等、原子力産業の全ての分野で事業を展開しており、福島原発事故では、サルコジ大統領、アレバ社アンヌ・ロベルジョン最高経営責任者(CEO)が相次いで来日したのは、この福島原発事故の処理如何によっては世界の原発に対する取り組みが方が劇的に替わるだろうという危機感であったからで、同時にアレバ社の技術の高さを誇示するためにも事故処理を請け負うという気構えがあったようだが、政府・東電はこれを断り、自国の技術で立ち向かうことを宣言した。

アンヌ・ロベルジョン総裁は、フランス政府の国策としての原子力産業の牽引者として、地球温暖化対策の柱として、地球に優しい原子力推進を強力に推し進め、「原発ルネッサン」を指揮し積極的な投資を展開した。別称「アトミック・アンヌ」と呼ばれ、世界の女傑ランキングの上位にあったが、しかし、07年、巨額を投じてアフリカのウラン鉱山を買収したが、残念ながら埋蔵量が少なく、投資は焦げ付いた。さらにウランの価格も世界的にダブツキ気味で価格が下落している。

さらにフィンランドに建設中の原発もアレバ社が全面的に建設・運用を請け負っていた

